

## 神学部出身の西条栄光教会初代牧師、戒能団平氏から教えられた世界

遊 口 親 之

### ◆日本基督教団西条栄光教会、国の登録有形文化財に

2021年2月26日、この日の官報告示をもって愛媛県西条市の西条栄光教会群（会堂、牧師館、幼稚園、1951年竣工）が、「日本の伝統建築とモダニズム建築が融合した建築物」として国の登録有形文化財として登録された。この知らせを受け、西条栄光教会の古谷健司牧師をはじめ、教会員一同は喜びに包まれた。登録申請に至るまでには、「西条栄光教会保存再生ワーキンググループ」（代表：愛媛大学名誉教授、<sup>まがたきよただ</sup>曲田清維）の皆さんに本当に御世話になった。長年、このグループの数多くの建築家、大学関係者、建築を愛する市民の方々から、多忙な中、献身的に時間と専門的な建築の知識を提供していただいた。「将来、重要文化財として指定されるだろう」との夢をもって、今もなお、関わり続けて下さっている。頭の下がる思いだ。

教会の現状は、創立当初とは違い、教会員の高齢化（平均年齢は80歳近い）により礼拝出席人数は10数名である。会堂等の改修も進んでいない。何とか財源を確保し、再生・保存したいと願っている。教会の未来を夢見ながら、祈り、努力することは、信仰の再生につながると信じ、歩みを続けている。

### ◆関西学院と私

私は、1962年に、関西学院大学文学部史学科（西洋史・川村ゼミ）に入学した。当時、構内にあった静修寮で寮長を経験し、久山康教授（文学部哲学科）宅で寮のあり方の助言をいただいたこともあった。

卒業後は地元愛媛の県立高校の教諭となった。きわめて平凡な高校教師で、生徒や教師仲間に支えられ、楽しく充実した38年を過ごすことができた。

私が教師となった1967年頃の愛媛は、勤評闘争直後で、重苦しい空気が教育界に残っていた。学院でリベラルな教育を受けた者として、「学問（教育）の自由」、「信教の自由」、「良心とは何か」等を教育の現場で常に問い葛藤した。

私と関西学院との関りは、地元の県立西条高校3年生の時からであった。私が所属していた日本基督教団西条栄光教会の戒能団平牧師が、今の神学部主催の「関学献身キャンプ」（現「関学ユースキャンプ」）に伴って下さった。このキャンプで、山崎治夫著『地の果てまでーランバス博士の生涯』（1960年）に出会い、感銘を受け、関学受験の動機の一つとなった。

無事合格し、学院入学の保証人は、戒能団平牧師の神学部の先輩、関西学院教会の長久清牧師（後に関西学院宗教総主事、礼拝学・教会建築が専門）



左：牧師館、右：礼拝堂（2018年10月、筆者撮影）



礼拝堂の奥に幼稚園が見える。  
（建築写真家、北村徹氏によるドローン撮影）



静修寮玄関前の筆者

であった。また、静修寮の保証人は田中彰寛経済学部教授（ドイツ語、オルガン奏者、シュヴァイツァー研究者）で、田中教授の父は、神学部第1回卒業生田中義弘（元関西学院神学部教授）だった。戒能牧師の紹介とはいえ、これら2人の先生は、関西学院の歴史の1ページを飾る方だけに、地方から出てきた若者にとっては、あまりにも贅沢なことであった。無論ご挨拶には父親と行った。父はキリスト者でもなく、地方の農業・漁業と仏教の世界しか知らない人だっただけに、今にして思えば、さぞ緊張したことだろう。

教会生活においても、恵まれた出発であった。教会は甲陽園伝道所（現甲陽園教会）に通った。関西学院大学神学部の藤井孝夫助教授（1964年より教授）が開拓伝道を始めたばかりであった。藤井牧師は戒能牧師の後輩で、旧知の関係のようだった。それで、戒能牧師は安心して私を藤井牧師に紹介してくれたのだろう。

大学時代の4年間の信仰生活は、今日まで信仰を維持できた源となった。また、藤井牧師の夫人悦子さん（旧姓森分）がランバス宣教師ゆかりの愛媛・八幡浜教会出身であったこと、さらに教会役員を中心であった宮井キミさんは、ランバス伝道の拠点、大分・三重教会の出であり、教会の重荷を背負う信仰者の姿勢を見せていただいた。この3人の方々との出会いが契機となり、学院創立百周年記念（1989年）には、感謝をこめて下記の2篇の小論文を地元の地域研究会誌『ソーシャル・リサーチ』（創刊号：1972年）に発表した。

- ・「南予におけるランバス宣教師の業績について」（1987年）
- ・「関西学院大学創立期における自助会について―郷土出身の大久保繁雄、畑歎三らを通して―」（1990年）

これらの研究発表の後、私は次第に愛媛にゆかりのあるキリスト者、新渡戸稲造、留岡幸助、安藤正楽、賀川豊彦、矢内原忠雄等の研究に取り組むことになった。その間、関西学院同窓会愛媛・東予支部長（11年間）や関西学院同窓会評議員（13年間）をさせていただいた。このことで、さらに学院を身近に感じさせてもらった。

#### ◆戒能団平牧師

1909年生まれの戒能団平は、松山市の北予中学卒業後、進学した東京物理学校高等師範科を中退し、1930年に関西学院神学部に入學した（1929年、W. J. キャラハンより受洗）。

1935年に神学部を卒業すると、朝鮮・台湾のメソジスト教会で牧会した。戦後、故郷愛媛に帰り、この地方で伝統ある小さな組合系の日本基督教団小松教会と西条教会の伝道に励んだ。まだまだ農村社会のキリスト教に対する偏見は強く、経済的にも貧しい時代で、壮絶な伝道の戦いであった。

1948年9月、夢に描いていた倉敷レイヨン（以後、倉レ）西条工場の寄宿舎における聖書研究会の指導者として出入を許された。繊維産業全盛時代で、この小さな町の倉レに4,000人程の労働者が全国から集った。次第にキリスト教ブームの時を迎え、信仰以外にも、キリスト教を通じて映画・文学・絵画等を学ぼうとする寮の青年男女も増え、倉レにおける文化宗教活動



自宅で寛ぐ戒能団平牧師

の中でこの聖研は高い評価を得た。この工場聖研の集会は、20年以上継続した。当時は、全国的にも職域伝道が活発な時でもあり、戒能牧師の倉レにおける実践は、戦後間もない頃の貴重な伝道の記録である。1954年の倉レ聖研7周年では、関西学院大学神学部の松木治三郎教授や、W. D. ブレイ教授らを招いている。

この工場聖研が源流となり、西条市東町の倉レ折善寮で西条栄光教会が設立され、1949年6月26日、最初の礼拝が持たれた。8月15日には、日本基督教団第二種教会として出発し、正教師戒能団平が管理者に任命された。祈りと希望を実現するため、地域や会社の協力もいただきながら会堂建築の気運が高まった。戒能牧師の存在なくして、教会設立や教会群建築はあり得なかったと話す信徒は多い。

## ◆戒能牧師の神学部同期生

1935年に戒能と共に関西学院神学部を卒業した仲間で牧師になったのは、戒能以外に次の4人がいる。

### 【甲斐則行牧師】

甲斐牧師は学生の頃から優秀な方で、戒能牧師の学生時代の信仰上の苦悩を理解していた唯一の方だと聞いている。ランバス伝道の拠点、大分出身で、さらに私が御世話になった甲陽園伝道所の宮井キミさん（当時、西宮北口在住）の弟だった。甲斐牧師は堺清水橋教会で牧会したが、48歳で他界した。最近、大阪府立大学名誉教授（国際経済学）唄野<sup>ばいの たかし</sup>隆氏の著書の中で、1947年、甲斐牧師から受洗したとの記述にふれた。当時の甲斐牧師の伝道の一端がうかがえる。

また、ある古書目録を見ていたら、甲斐牧師の編集した『神学会雑誌』（創刊号、関西学院神学会、1932年）を見付けた。この古書は見えていないが、甲斐牧師の神学に対する探究心を察した。

1975年4月13日、松本夫妻、森分夫妻、中森夫妻、戒能夫妻らと甲斐則行牧師夫人等10人がパイオニアの朝霧保養所に集まり、昔の関西学院大学成全寮時代を懐かしんだ。

### 【中森幾之進牧師】

中森幾之進牧師は、東京・山谷のドヤ街の底辺伝道や部落解放運動、農民運動に深く関わり、さらに八幡浜教会では、戦後の民主化やPTA活動にも参加し、常に社会との接点を求めた。

著書には、貧民街で生活に苦しんでいる方々にあたたかい眼差しを向けた『下へのぼる歌』（1973年）や『信仰どじょう鍋』（1966年）がある。また、陸の孤島とも言われた愛媛の三崎半島まで熱心に伝道したとの記録もある。1981年12月6日に亡くなられたが、『キリスト新聞』（1982年1月30日）は、「壮烈な戦死」と報じた。松本頼仁牧師は式辞の中で「彼は男の中の男」と言い、その理由は「男の一言に生涯かけて責任をとった」からだと紹介した。

当時、入試では面接が重視された。もともと英語が得意でない中森は、ヘーデン神学部長の質問に、「アイ・アム・インバイテッド・バイ・ジーザス」と、何を聞かれても繰り返した。

西条栄光教会でも説教をしていただいた（1950年6月23日）。

### 【松本頼仁<sup>よりよし</sup>牧師】

松本頼仁牧師は、パイオニア創業者、松本望の弟である。戒能・中森らと同じく、朝鮮のメソジスト教会で伝道の経験を持つ。松本牧師が戒能牧師を西条に訪ねてきた折、私も西条栄光教会牧師館でお会いしたことがあった。英語が達者な松本牧師は、愛媛・滑床の英語キャンプの講師に迎えられたりもした。その折、日本の植民政策が展開される朝鮮にあって、朝鮮人と共に生き続けた伝道者、乗松雅休について伺う機会を得た。乗松については、私なりに資料収集も進んでいたが、松本牧師は、朝鮮で体験した乗松の証言資料を惜し気もなく提供してくれた。乗松に関する論文を1976年に『福音と世界』に発表した乗松研究の第一人者大野昭牧師は、後に私の乗松の小論を見て下さり、「この時期の乗松の資料目録としては行き届いている」と褒めて下さった。これは一重に松本牧師のおかげである。その後、私は松本牧師の父、松本勇治牧師に関する小論「松本勇治らブレマスの新居浜伝道」（「黒崎幸吉、矢内原忠雄らの無教会主義について」『桃山学院短期大学瀬戸内産業文化研究』第9号、1985年）を書いた。不思議なご縁であった。

### 【森分喜平牧師】

森分喜平牧師は、八幡浜教会の出身の牧師であった。九州各地を伝道し、最後は神戸丸山教会で60年、40余年の伝道生活を終えた。関西学院神学部卒業後は、同級生松本牧師らと同様、朝鮮のメソジスト教会で牧会した。

1974年5月、末期的と言われる胃癌の手術を受けた。5月下旬、中森、松本、戒能牧師らが駆け付けると、彼はその友情を喜んだそうだ。その折、中森牧師も山谷伝道の過労で入院し、退院直後であったので、森分牧師は彼の健康を案じた。中森牧師は「キリストがそこに居られるから」と答えられた。そこから清夫人によって森分牧師の著書『先立つ給う主』（1978年）の題名がつけられた。この著書の前文に神学部時代の戒能牧師らの「救いの確かさ」に真摯に取り組んだことが記されている。

る。神学部同級生 11 名、その内、生涯伝道者として歩んだのは、今まで紹介してきた甲斐、中森、松本、森分、戒能ら5人だったと述べられている。

森分牧師の御子息、森分直樹牧師は私の同級生で、寮生活（彼は成全寮）を共にした。ある日、寮のお風呂で 2 人だけになった時、「教会では牧師も大事だが、教会を支える信徒も大事だよ」と話しかけてきた。私にとって何か大切なことを示された思いで、忘れがたい言葉であった。社会に出てしばらくして、私が愛媛の南予のランバス伝道の研究に取り組んでいた頃、当時、森分氏が牧会をされていた八幡浜教会を訪ねた折には、多くの資料を見せていただき、励ましてもらった。私が2014年に『平和と自由を希求した人—愛媛における新渡戸稲造・矢内原忠雄・乗松雅休<sup>のりまつまさやす</sup>・安藤正楽らの足跡—』（愛媛新聞サービスセンター、2014年8月）を出版した際には電話をいただき、「またゆっくりお話ししましょう」と再会を約束してくれた。

#### ◆西条栄光教会献堂建築にかかわった人々

では、西条栄光教会に戻り、国の登録有形文化財に登録された、会堂、牧師館、幼稚園の建築（1951年竣工）に関わった、戒能牧師以外の3人を紹介しよう。

##### 【倉レ社長、大原總一郎（1909～68）】

当時、倉レ社長は、大原孫三郎から長男の總一郎が継承していた。孫三郎は、倉敷教会に所属し、キリスト教的人道主義を基盤にした実業家であった。岡山孤児院の創設者、石井十次の福祉活動や大原美術館等の社会・文化活動に多大の貢献をした。石井十次、大原孫三郎等については、関西学院大学人間福祉学部の室田保夫教授（現・名誉教授）の論文・著作からいろいろ教えられた。孫三郎の精神は、總一郎にも引き継がれ、若者の工場聖書研究会に呼応し、会堂建設へとつながった。

西条栄光教会のため、西条高校に隣接する明屋敷の陣屋跡に1,200坪の土地が与えられた。倉敷の美観地区に似た、西条で最も由緒深い、よき景観の地である。

建物は、会堂、牧師館、そして、従業員の子弟が通う付属幼稚園が併設された。ランバス宣教師の関与した教会は、愛媛、香川でも幼稚園を持ち、その地域の幼児教育の先駆的役割を果たしていたことを戒能牧師は熟知していたはずである。孫三郎に思想的影響を与えた一人にイギリス産業革命時代のロバート・オウエンがいる。幼児教育といえばフレーベルが生みの親であるが、オウエンの方が、就学前の子どものための学校の実践者であった。そのことを、日本フェビアン研究所の創立者である總一郎が知らないはずがない。『西条工場 50年の回顧』（1987年）や教会に伝えられる話によれば、総工費 1,000 万円の内、800 万円は倉レが負担したと言う。戦後間もない当時においては、相当な金額である。献堂式は1951年11月1日であった。この式に總一郎は出席し、記念写真を残している。

##### 【モダニズム建築家、浦辺鎮太郎<sup>しづたろう</sup>（1909～91）】

西条栄光教会群を設計した建築家は、浦辺鎮太郎であった。当時は倉レの営繕技師で、28年勤めた後、建築家として独立する。大原總一郎とは、中・高の同級生で、倉敷を「ドイツの古都ローテンブルクにしよう」と、風土に根ざした町づくりを目指した。この2人に、関西学院神学部出身の民芸家、外村吉之介を加え、「倉敷を作った3人」と呼ばれ、總一郎の夢を描いたゲマインシャフト的な地方都市、倉敷の町づくりに貢献した。浦辺の代表作品に、倉敷国際ホテル（1965年）・倉敷アイビースクエア（1975年）等がある。共に日本建築学会賞作品賞を受賞した。

西条栄光教会群の建設は、多くの浦辺の作品の中でどのような時期にあたるのか。『浦辺鎮太郎作品集』（2003年）等を見る限り、倉レ富山工場第一期（1950年）に続く作品で、事実上のデビュー



『西条栄光教会 登録有形文化財への道』（日本建築学会四国支部西条栄光教会保存再生WG、2021年3月）、7頁より。

一作である。会社の営繕課の一人として活動していた時期なので、「建築家浦辺」を前面に出すことはなかった。浦辺は、建築雑誌等によく寄稿している。私もかなり浦辺の文章を収集し、読む機会もあったが、西条栄光教会の建築に関する記述を見つけることはできなかった。

40才の時（1949年）、倉庫大阪本社営繕部長となり、2年後の1951年に西条栄光教会を建てた。その年、関西学院の目の前の西宮市甲東園に、阪急電鉄の電気課長が大正末期に建てた家に家族と共に転居する。当時甲東園には、浦辺の京都大学時代の恩師で、関西建築界の父と言われる武田五一博士ごいちの設計した別荘（「芝川別荘」、現在明治村へ移築）もあった。また、甲東園の住宅開発が本格化した時期とも重なる。

その住居はヴォーリス建築を代表する神戸女学院や関西学院にきわめて近く、かなり高齢でも自宅から徒歩で行ける距離であった。その時の自宅の様子については、『新建築』（1978年8月）の小論「只の家」に紹介されている。

学生時代、甲東園駅から関西学院に至る道から見えた洒落た住宅群は今も目に焼きついている。それは、阪神間のモダニズム住宅が西宮で最も多く建てられた時期と重なる（『新建築』の調査より）。私は西宮の甲陽園伝道所に通っていたので、作家、遠藤周作が受洗したモダニズム建築、カトリック夙川教会や辺りの住宅を見ながらよく散策した。浦辺は、甲東園に転居した直後、この夙川で個人住宅を設計している（『新住宅』1952年1月）。浦辺の関西における初仕事である。西条栄光教会の設計と併行して仕事をしていたのかも知れない。

私自身、浦辺が甲東園に住んでいたのを知ったのは、その死亡記事を『愛媛新聞』（1991年6月11日の記事）で見てからである。自宅住所「西宮市甲東園1の7の8」が記載されていて、驚いた。故郷であり、仕事や大原家とつながりの強い倉敷に当然住んでいるものと、信じこんでいたのである。学生の頃、すれ違ったり、自宅前を通りかかったりしていたかも知れない。ひと言、感謝の気持を伝えなかった。

浦辺の後継者の一人に、建築家、辻野純徳氏がいる。大阪大学非常勤講師をしていた時の教え子である。大原総一郎没後、浦辺と辻野のコンビで倉敷中央病院等の改修を手がけ「病院らしくない病院づくり」を目指した。辻野も甲東園に住んでおり、浦辺と共に阪急電車を利用していた。その後の建築家人生も浦辺と共に歩み、今日まで浦辺の建築家魂を忠実に継承している。

もう一人、浦辺にとって忘れられない人物がいる。関西モダニズムの重鎮、村野藤吾である。浦辺が大原総一郎と共に尊敬した建築家である。彼は西宮のすぐ隣の宝塚に住んでいた。宝塚も西宮、芦屋についてモダニズム住宅が目立った所である（『新建築』1970年代まで調査）。浦辺は、転居後すぐに村野邸を訪ねている。村野の最初の作品は南大阪教会（1928年）である。この教会は、芥川賞作家、阪田寛夫が所属した教会としても知られる。浦辺の西条栄光教会のモデルはどこか。西宮に甲子園ホテル（1930年）を残した建築家、遠藤新による自由学園明日館やバプテスト派目白丘教会等を挙げるができるが、敬愛する村野の上記の作品に目を向けたことも十分考えられる。

現在、関西学院周辺では「モダニズム建築探訪」が盛んである。甲東公民館で、「西宮のモダニズム建築と文学」（2021年9月）が企画されているのを見た。過去の実施例として、「閑静な文教の街夙川モダニズム建築探訪」（西宮観光協会）がある。学生時代、私は何の自覚もなしに学内外で相当のモダニズム建築に出会った。その頃醸成された建築を見る目が、少しは今日の西条栄光教会群を見る時、役立っているのかもしれない。

#### 【神学部出身民芸家、外村吉之介とのむらきちのすけ（1899～1993）】

西条栄光教会群の建設にかかわった人物として、関西学院神学部出身で、民芸家の外村吉之介の名を挙げた。日本民芸運動の創始者、柳宗悦を師とし、大原総一郎の招きを受け、1946年に福井県大野市の疎開先から倉敷に居を移した。伝道者であったが、次第に民芸家として独立した。外村は神学部卒業後、京都 YMCA で働きながら、再び同志社で神学を学び、信仰の核心を得る。その間、柳宗悦、河井寛次郎たちとの交流を経て、民芸の世界に目を開かれる。山口、浜松の教会を転々としながら民芸を深め、本格的織物職人の地位を固めた。

外村は、建築にも関心を寄せた。1948年に建てられた倉敷民芸館（初代館長、外村吉之介）は、外村

自身が設計し、浦辺が裏方にまわったと言われる。民芸館は、美観地区において、古い建物を再生し、公開した最初の事例という。外村と浦辺は、共に歩みながら、微妙な相違もあった。「古い型にこだわる外村」との見解は、浦辺の後継者である建築家辻野純徳氏によるものである。

西条栄光教会群の中でも、牧師館は「ゲートレッジテーブル」（英国の17～18世紀の工芸品）を中心に民芸調の雰囲気漂っている。それだけに、民芸家外村吉之介の助言があったことは否定できない。この頃、外村は、西条の隣の今治市の桜井漆器の指導のため、度々戸倉屋漆器を訪ねている。『西条栄光教会週報』によると、外村は2度程教会を訪ね、戒能牧師と会っている（1950年7月16日と1952年1月8日）。

大原孫三郎と總一郎は、日本における民芸運動の創始者、柳宗悦の感化を受け、浦辺鎮太郎もその精神を継承し、建築に生かす努力をした。彼らに外村を加えた形で、倉敷の民芸は開花する。外村は、1946年に倉敷に居を移し、岡山民芸協会（大原總一郎会長）を創立した。またこの年、浦辺らと岡山県下の民家採集を開始し（～1948年）、『山陽新聞』に連載した。これが、民芸調の西条栄光教会の設立につながったのである。

旧西条藩陣屋跡のお堀端に囲まれた西条栄光教会のすぐ隣に県立西条高校、そのすぐ南に愛媛民芸館・博物館（旧東予民芸館、1967年竣工）がある。浦辺が58歳の時の作品である。民芸館建設に尽力した大原總一郎は、病気のため開館式に出席できなかった。しかし、すでに用意されていた開館挨拶が会報に掲載された。この時の大原の年齢は57歳だった。民芸館の展示品の多くは、京都で柳宗悦の感化を受けた西条市小松出身の菅吉暉かんよしてる氏から、一括購入した。その作品を倉敷民芸館長、外村吉之介が鑑定した。外村の民芸観について、後の愛媛民芸館西堀勝館長は、外村自身が常に説いていた言葉を引用し、説明している。「民芸は物を愛してそこに沈積するのではなく、物を介して心を学ぶことであります」（『愛媛民芸』1995年12月）。また、文野千栄子初代館長は、開館の挨拶で次のように述べている（1967年6月）。「東予（現愛媛）民芸協会の設立から民芸館の建設にかけまして、倉敷民芸館長外村吉之介先生が、わが事のようにそのすべてにわたってご指導いただき、われわれ一同感謝しております」（『東予民芸』1968年3月号）。

今日、西条栄光教会群がモダニズム建築として建築家や大学関係者らに注目される中、建築家、浦辺鎮太郎とともに関わった民芸家、外村吉之介について、同窓生としてももう少し深く知りたいという思いが高まった。その折、関西学院大学神学部の神田健次教授（現名誉教授）が学院史の立場から書かれた「外村吉之介」に関する数々の論文に触れ、外村の新たな世界を見せていただいた。それが契機となり、私も私が住んでいる地域で「外村吉之介」を紹介したいと思い、私の属している地域史を中心とする会誌に論文「民芸家外村吉之介の世界とその周辺（上）－伊予西条から考える－」を掲載していただいた。その小論をご覧になった神田先生より、『学院史編纂室便り』を紹介され、今回の投稿が実現した。このような機会を与えてくださった神田先生に感謝いたします。

【関西学院大学文学部史学科1966年卒業】

関西学院大学神学部主催「関学献身キャンプ」

－1961年－

筆者（最前列右から4人目）と関西学院の関係は  
ここ（西条高校3年の夏）から始まりました。

